

伊良原舞台に短編映画

行橋の橘監督が制作 映画祭に出品

行橋市在住で映画監督・映像作家の橘剛史さん(25)が、みやこ町の伊良原地区を舞台にした短編映画「心臓の弱い男」を作った。映画仲間がボランティアで撮影を手伝い、地元住民もエキストラとして協力。国内有数の短編映画祭にも出品し、各地での上映を目指す。

橘さんはイベントや結婚式、プロモーションビデオの仕事をしたり、ドキュメンタリーや短編映画などを制作。これまで、日本ドキュメンタリー動画祭のドキュメンタリー部門でグランプリを受賞した「出張紙芝居く笑顔を君にく」などを手がけてきた。

今回の映画は、「ドキドキすると発作を起こす青年」が主役。若い女性や誘惑の多い都会を離れ、のどかで自然豊かな田舎で病気を

住民多数出演 春DVD化

を治そうと伊良原にやって来るが、その診療所で若い女性看護師と出会う。「心臓の弱い男」が恋をするかどうかの……。二人の心境の変化を交えながら、物語は進む。

診療所は実際にある町立みやまびこ診療所を借りて撮影した。待合室の患者は地元の住民たちが演じ、手押し車で近所へ向かうお年寄りや畑仕事をする人など、多くの住民が出演した。

短編映画は長くても25分程度で、コメディからヒューマンドラマまでジャンルも多彩だ。短さゆえに、演出や脚本の切れ味が見終わった後の余韻に直結し、監督のセンスが問われる。

今回の作品はセリフがないのが特徴で、橘さんは「キャラクターの心情をリアルに表現するには『語るのではなく、見せること』で思いを伝えたかった」と話す。セリフがない分、小道具でシチュエーションを表現。短編映画は海外でも

人気があり、「日本の作品が世界にも伝わりやすい」と言う。

撮影は昨年11月末に始まり、編集を含め1カ月で完成した。20分の短編で大半は伊良原が舞台だが、行橋市や北九州市でもロケをした。作品は、米アカデミー賞の認定映画祭にもなっている「ショートショートフィルム・フェスティバル」に出品した。選考後であれ

ば、作品を一般に発表できるので、今春にはDVD化するという。

小学生のころ、テレビで見た米映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」が、この世界に入るきっかけだったという橘さん。「いつか劇場公開されるような映画を撮って、世界に通用する映画監督になりたい」と未来に夢をふくらませている。(二宮俊彦)



みやまびこ診療所前での撮影風景。中央が橘剛史さん。みやこ町犀川下伊良原、片岡エイスケさん撮影